

ゴーリーとマンガ家と本屋

眞鍋由比

今、伊丹市立美術館で「エドワード・ゴーリーの優雅な秘密展」やっています（15日まで）。T・S・エリオットの『ポッサムおじさんの実用猫百科』（ミュージカル『キャッツ』の原作）などの挿絵や、オペラMikadoの日本風の珍妙な衣装デザインなどもてがけていますが、なんといってもゴーリーと言えばつぎつぎとアルファベット順に子どもが死んでいく絵本『ギャシュリークラムのちびっ子たち』（この本、人気がありすぎて当館では紛失してしまいました）

「誰も幸せにしなかったが猫だけは幸せにした」というゴーリー、6匹の猫との自画像も素敵でした。アルファベットにそった絵本を6種類ほど出版しているゴーリー、『雑多なアルファベット』なら当館で読めます。面白いと思われたら、『うろんな客』もどうぞ。

そのゴーリーを紹介していた漫画家の吉野朔美さんが亡くなったことがゴールデンウィークで一番のショックでした。「本の雑誌」にいつも載っている彼女の漫画で紹介されたゴーリーは「癒されてたまるか」（『犬は本よりも電信柱が好き』）。癒し系が流行しているなかでのひとことでした。恐怖の「猿の手」も、『私家版』などの映画と小説の比較も、愛とユーモアにあふれた紹介で読み続けて楽しかった（「吉野朔実劇場」）。

『朗読者』『ジャイアンツ・ハウス』の紹介は秀逸だったし、赤毛のアンと少女パレアナをイラストでどう描き分けるのか（どちらもおさげ、11歳、そばかすで孤児）など、本を読むことが普通に好きで、人生を楽しんでいるひとの漫画でした。もう読めないなんて本当に哀しい。



現在、当館では全国読書感想文課題図書（中学・高校とも）を受入中です。高校の課題図書『ハーレムの闘う本屋 ルイス・ミショーの生涯』ヴォンダ・ミショー・ネルソン著 あすなろ書房 2015 は黒人のための黒人の書いた本ばかりを集めた本屋をハーレムに立ち上げたルイス・ミショーの話。基本は実話ですが、資料が足りなかった部分は推測で埋まっているのでフィクション。最初に自転車を盗んだり、お店のお金をとって自分で商売を始めたりする、ある意味困った男。しかし彼の兄は全米でも有数の宗教家で、彼を「まともな」人間にしようと考えていた…。彼がなぜ本に目覚めたのか、黒人運動家マルコムXとの交流などが描かれている。本を読んで自分の祖先のルーツを歴史を知ることは黒人に必要なことだ。白人に馬鹿にされ支配され続けるわけにはいかない。自分たちの文化をきちんと知って自立しなければ、いつまでも状況は変わらないという話、ちょっと身に染みた。本を読んで知るべきことを知って、自分で自分に必要なものは何か考え判断して生きていく。意外と難しいことではないか？いまの日本で本を読めない人は少ない。けれど本当に人生に役立たせる意味で本を読んでいる人はどれくらいいるだろう。単なる本屋ではなく、人生を変える、教育さえ受けさせる本屋を営んだ男は子どものころは盗みすらしていた。善悪の基準なんてあいまいだ。いろいろな人の証言からなるこの本は、視点がつぎつぎ変わるのでちょっと散漫な印象を受けるかもしれない。けれどFBIのメモなども出てきて（これは情報公開法にのっとって正式に認められた資料）、政府に対して都合の悪いごきをする人間はFBIがきっちり監視していたんだなということもわかる。人間は決して一面的ないきものではない、大切なものは人任せにせず自分なりに見つけていかないと！という本でした。